

両足が嵌ったと思った貴兄に上級編を

こうなってくると贅沢な趣味人である。最初から行う鍛冶仕事なので、本職となんら変わりはない。もちろん刀匠からしっかりと指導していただけるので、心配は無用だが、初級中級と踏んできたのだから、流れも分かってきたであろう。これまでの経験を基に挑戦してもらいたい。

上級編は玉鋼たまはがねからの作業を行ってもらおう。玉鋼たまはがねとは少々乱暴な説明であるが、砂鉄を三日三晩 木炭でゆっくり溶かしてつくり、不純物の少い溶岩のような鉄の塊のことで「たたら」と云う和鉄精錬法でつくられている。

この製法は古く、日本刀の鍵かぎにもなっている。今では奥出雲の「日刀保たたら」という所で作られる。伝統として維持されているような状態のもので、これがなくなってしまうたら日本刀は作れなくなってしまう（日本刀とはこの玉鋼たまはがねを使うことが条件である）。貴重な存在なので個人的にはいずれ見学してみたい場所でもある。

その玉鋼たまはがねを火床で温め（ここで云う「温め」とは鉄を変形させることの出来る温度を云う）、潰し、板状の地鉄という状態にし、それをテコ鉄がねという道具に付ける。テコがねに付けるのも結構な「技」が必要になってくるので気合が入る。しっかり手順を頭に入れて、練習をして取り組みたい。

付けた地鉄を土台にして、一本分の刀と相当の重さの鋼を乗せて積んでいく作業は積み沸かしつみわかしという。結構な重さに苦勞して大汗をかくが迫力ある作業で面白い。

積み沸かしが終わると、延べ板状にして叩き、折り返してはまた叩く「折り返し鍛錬」と云う作業に入る。折り返し鍛錬の最後にこれを約12mm、6mmの角棒のように延ばし、この鋼を小柄の長さに切断する。すると何本もの鋼材が出来るので中級の火作りからの作業ができるようになる。

一振りの日本刀を作刀する時は、この素延べすのべで伸ばした長さが刀の長さになる。

以上ざっとであるが、小柄工房の流れを紹介させていただいた。

実際の工程では時間の掛かる作業が結構あり、特にテコ鉄に玉鋼を付けようとすると失敗が付きまとう。朝から初めて夕方になってようやく付くなどという失態も起きる可能性もある。

火作りも、夢中になったり、出来が気に入らないといつまでも終わらない。

鑪やすり掛けなどは、何本も小柄を作っていると徐々に気に入らない部分が増えていき、いつまでもシュッシュッと掛けていたりする。

時折、他の作業も出来たりする。例えば金槌作り。え？そんなものも自分で作るの？と思うかもしれないがよく考えれば当然で、刀を作るのだから一応は出来る。もちろん専門の職人の腕には適わないが、自前の金槌で小柄を作ったりするのも一興であろう。

炭切りなども体験してみるのも面白いかもしれない。ふだんは刀匠が予め用意しているので不要であるが、本来「炭切り何年」の世界である。逆に体験したいという人もいるだろう。炭で鼻の穴の中まで真っ黒になるのを覚悟の上（風呂があるので帰りはご安心）で申告して欲しい。

これを通じて一見離れた「鍛冶の世界」「刀の世界」を、工作、趣味などと身近に感じ、興味を持っていただければ幸いである。

了